父

太宰治

イサク、父(ちち)アブラハムに語(かた)りて、
父(ちち)よ、と曰(い)ふ。
彼(かれ)、答(こた)へて、
子(こ)よ、われ此(ここ)にあり、
といひければ、

——創世記

二十二ノ七

義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類がはじまって、すぐその直後に起った。信仰の祖とい

われているアブラハムが、その信仰の義のために、わが子を殺そうとした事は、旧約の創世記に録されていて有名である。

エホバ、アブラハムを試みんとて、

アブラハムよ、

と呼びたまふ。

アブラハム答へていふ、

われここにあり。

エホバ言ひたまひけるは、

汝（なんじ）の愛する独子（ひとりご）、すなはちイサクを携（たずさ）へ行き、かしこの山の頂きに於（おい）て、イサクを燔祭（はんさい）として献（ささ）ぐべし。

アブラハム、朝つとに起きて、その驢馬（ろば）に鞍（くら）を置き、愛するひとりごイサクを乗せ、神のおのれに示したまへる山の麓（ふもと）にいたり、イサクを驢馬よりおろし、すなはち燔祭の柴薪（たきぎ）をイサクに背負はせ、われはその手に火と刀を執（と）りて、二人ともに山をのぼれり。

イサク、父アブラハムに語りて、

父よ、

と言ふ。

彼、こたへて、

子よ、われここにあり、

といひければ、

イサクすなはち父に言ふ、火と柴薪(たきぎ)は有り、されど、いけにへの小羊は何処(いずこ)にあるや。

アブラハム、言ひけるは、

子よ、神みづから、いけにへの小羊を備へたまはん。

斯(か)くして二人ともに進みゆきて、遂(つい)に山のいただきに到れり。

アブラハム、壇を築き、柴薪をならべ、その子イサクを縛りて、之(これ)を壇の柴薪の上に置(の)せたり。

すなはち、アブラハム、手を伸べ、刀を執りて、その子を殺さんとす。

時に、ヱホバの使者、天より彼を呼びて、
アブラハムよ、
アブラハムよ、
と言へり。
彼言ふ、
われ、ここにあり。
使者の言ひけるは、
汝の手を童子（わらべ）より放て、
何をも彼に為すべからず、
汝はそのひとりごをも、わがために惜まざれば、わ
れいま汝が神を畏（おそ）るるを知る。

云々(うんぬん)というような事で、イサクはどうやら父に殺されずにすんだのであるが、しかし、アブラハムは、信仰の義者(ただしきもの)たる事を示さんとして躊躇(ちゅうちょ)せず、愛する一人息子を殺そうとしたのである。

洋の東西を問わず、また信仰の対象の何たるかを問わず、義の世界は、哀(かな)しいものである。

佐倉宗吾郎一代記という活動写真を見たのは、私の七つか八つの頃の事であったが、私はその活動写真のうちの、宗吾郎の幽霊が悪代官をくるしめる場面と、それからもう一つ、雪の日の子わかれの場を、いまでも忘れずにいる。

宗吾郎が、いよいよ直訴を決意して、雪の日に旅立つ。わが家の格子窓から、子供らが顔を出して、別れを惜しむ。ととさまえのう、と口々に泣いて父を呼ぶ。宗吾郎は、笠で自分の顔を覆うて、渡し舟に乗る。降りしきる雪は、吹雪のようである。

七つ八つの私は、それを見て涙を流したのであるが、しかし、それは泣き叫ぶ子供に同情したからではなかった。義のために子供を捨てる宗吾郎のつらさを思って、たまらなくなったからであった。

そうして、それ以来、私には、宗吾郎が忘れられなくなったのである。自分がこれから生き伸びて行くう

ちに、必ずあの宗吾郎の子別れの場のような、つらくてかなわない思いをする事が、二度か三度あるに違いないという予感がした。

私のこれまでの四十年ちかい生涯に於いて、幸福の予感は、たいていはずれるのが仕来(しきた)りになっているけれども、不吉の予感はことごとく当った。子わかれの場も、二度か三度、どころではなく、この数年間に、ほとんど一日置きくらいに、実にひんぱんに演ぜられて来ているのである。

私さえいなかったら、すくなくとも私の周囲の者たちが、平安に、落ちつくようになるのではあるまいか。

私はことし既に三十九歳になるのであるが、私のこれまでの文筆に依って得た収入の全部は、私ひとりの遊びのために浪費して来たと言っても、敢えて過言ではないのである。しかも、その遊びというのは、自分にとって、地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合いの形に似たる浮気であって、私自身、何のたのしいところも無いのである。また、そのような私の遊びの相手になって、私の饗応を受ける知人たちも、ただはらはらするばかりで、少しも楽しくない様子である。結局、私は私の全収入を浪費して、ひとりの人間をも楽しませる事が出来ず、しかも女房が

七輪（しちりん）一つ買っても、これはいくらだ、ぜいたくだ、とこごとを言う自分勝手の亭主なのである。よろしくないのは、百も承知である。しかし私は、その癖を直す事が出来なかった。戦争前もそうであった。戦争中もそうであった。戦争の後も、そうである。私は生れた時から今まで、実にやっかいな大病にかかっているのかも知れない。生れてすぐにサナトリアムみたいなところに入院して、そうして今日まで充分の療養の生活をして来たとしても、その費用は、私のこれまでの酒煙草の費用の十分の一くらいのものかも知れない。実に、べらぼうにお金のかかる大病人である。一族から、

このような大病人がひとり出たばかりに、私の身内の者たちは、皆痩せて、一様に少しずつ寿命をちぢめたようだ。死にやいいんだ。つまらんものを書いて、佳作だの何だのと、軽薄におだてられたいばかりに、身内の者の寿命をちぢめるとは、憎みても余りある極悪人ではないか。死ね！

親が無くても子は育つ、という。私の場合、親が有るから子は育たぬのだ。親が、子供の貯金をさえ使い果している始末なのだ。

炉辺の幸福。どうして私には、それが出来ないのだろう。とても、いたたまらない気がするのである。炉

辺が、こわくてならぬのである。

午後三時か四時頃、私は仕事に一区切りをつけて立ち上る。机の引出しから財布（さいふ）を取り出し、内容をちらと調べて懐（ふところ）にいれ、黙って二重廻しを羽織って、外に出る。外では、子供たちが遊んでいる。その子供たちの中に、私の子もいる。私の子は遊びをやめて、私のほうに真正面向いて、私の顔を仰ぎ見る。私も、子の顔を見下す。共に無言である。たまに私は、袂（たもと）からハンケチを出して、きゅっと子の洟（はな）を拭いてやる事もある。そうして、さっさと私は歩く。子供のおやつ、子供のおもちゃ、子供の着物、子供の靴、いろいろ買

わなければならぬお金を、一夜のうちに紙屑(かみくず)の如く浪費すべき場所に向って、さっさと歩く。これがすなわち、私の子わかれの場なのである。出掛けたらさいご、二日も三日も帰らない事がある。父はどこかで、義のために遊んでいる。地獄の思いで遊んでいる。いのちを賭(か)けて遊んでいる。母は観念して、下の子を背負い、上の子の手を引き、古本屋に本を売りに出掛ける。父は母にお金を置いて行かないから。

　そうして、ことしの四月には、また子供が生れるという。それでなくても乏しかった衣類の、大半を、戦火で焼いてしまったので、こんど生れる子供の産衣(うぶぎ)や

ら蒲団(ふとん)やら、おしめやら、全くやりくりの方法がつかず、母は呆然(ぼうぜん)として溜息(ためいき)ばかりついている様子であるが、父はそれに気附かぬ振りしてそそくさと外出する。ついさっき私は、「義のために」遊ぶ、と書いた。義？　たわけた事を言ってはいけない。お前は、生きている資格も無い放埒病(ほうらつびょう)の重患者に過ぎないではないか。それをまあ、義、だなんて。ぬすびとたけだけしいとは、この事だ。

それは、たしかに、盗人の三分(さんぶ)の理にも似ているが、しかし、私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれている。その文字は、何であるか、私

にもはっきり読めない。たとえば、十匹の蟻(あり)が、墨汁の海から這(は)い上って、そうして白絹の上をかさかさと小さい音をたてて歩き廻り、何やらこまかく、ほそく、墨の足跡をえがき印し散らしたみたいな、そんな工合いの、幽(かす)かな、くすぐったい文字。その文字が、全部判読できたならば、私の立場の「義」の意味も、明白に皆に説明できるような気がするのだけれども、それがなかなか、ややこしく、むずかしいのである。

　こんな譬喩(ひゆ)を用いて、私はごまかそうとしているのではは決してない。その文字を具体的に説明して聞かせるのは、むずかしいのみならず、危険なのだ。まかり

間違うと、鼻持ちならぬキザな虚栄の詠歎に似るおそれもあり、または、呆(あき)れるばかりに図々(ずうずう)しい面(つら)の皮千枚張りの詭弁(きべん)、または、淫祠(いんし)邪教のお筆先、または、ほら吹き山師の救国政治談にさえ堕する危険無しとしない。

それらの不潔な虱(しらみ)と、私の胸の奥の白絹に書かれてある蟻の足跡のような文字とは、本質に於いて全く異るものであるという事には、私も確信を持っているつもりであるが、しかし、その説明は出来ない。また、げんざい、しようとも思わぬ。キザな言い方であるが、花ひらく時節が来なければ、それは、はっきり解明で

きないもののようにも思われる。
ことしの正月、十日頃、寒い風の吹いていた日に、
「きょうだけは、家にいて下さらない？」
と家の者が私に言った。
「なぜだ。」
「お米の配給があるかも知れませんから。」
「僕が取りに行くのか？」
「いいえ。」
家の者が二、三日前から風邪(かぜ)をひいて、ひどいせきをしているのを、私は知っていた。その半病人に、配給のお米を背負わせるのは、むごいとも思ったが、し

かし、私自身であの配給の列の中にはいるのも、頗(すこぶ)るたいぎなのである。
「大丈夫か？」
と私は言った。
「私がまいりますけど、子供を連れて行くのは、たいへんですから、あなたが家にいらして、子供たちを見ていて下さい。お米だけでも、なかなか重いんです。」
家の者の眼には、涙が光っていた。
おなかにも子供がいるし、背中にひとりおんぶして、もうひとりの子の手をひいて、そうして自身もかぜ気味で、一斗ちかいお米を運ぶ苦難は、その涙を見るま

でもなく、私にもわかっている。

「いるさ。いるよ。家にいるよ。」

それから、三十分くらい経って、

「ごめん下さい。」

と玄関で女のひとの声がして、私が出て見ると、それは三鷹(みたか)の或るおでんやの女中であった。

「前田さんが、お見えになっていますけど。」

「あ、そう。」

部屋の出口の壁に吊り下げられている二重廻しに、私はもう手をかけていた。

とっさに、うまい嘘(うそ)も思いつかず、私は隣室の家の

者には一言も、何も言わず、二重廻しを羽織って、それから机の引出しを搔きまわし、お金はあまり無かったので、けさ雑誌社から送られて来たばかりの小為替を三枚、その封筒のまま二重廻しのポケットにねじ込み、外に出た。

外には、上の女の子が立っていた。子供のほうで、間の悪そうな顔をしていた。

「前田さんが？　ひとりで？」

私はわざと子供を無視して、おでんやの女中にたずねた。

「ええ。ちょっとでいいから、おめにかかりたいっ

て。」
「そう。」
私たちは子供を残して、いそぎ足で歩いた。
前田さんとは、四十を越えた女性であった。永い事、有楽町の新聞社に勤めていたという。しかし、いまは何をしているのか、私にもわからない。そのひとは、二週間ほど前、年の暮に、そのおでんやに食事をしに来て、その時、私は、年少の友人ふたりを相手に泥酔(でいすい)していて、ふとその女のひとに話しかけ、私たちの席に参加してもらって、私はそのひとと握手をした、それだけの附合いしか無かったのであるが、

「遊ぼう。これから、遊ぼう。大いに、遊ぼう。」

と私がそのひとに言った時に、

「あまり遊べない人に限って、そんなに意気込むものですよ。ふだんケチケチ働いてばかりいるんでしょう？」

とそのひとが普通の音声で、落ちついて言った。

私は、どきりとして、

「よし、そんならこんど逢った時、僕の徹底的な遊び振りを見せてあげる。」

と言ったが、内心は、いやなおばさんだと思った。

私の口から言うのもおかしいだろうが、こんなひとこ

そ、ほんものの不健康というものではなかろうかと思った。私は苦悶（くもん）の無い遊びを憎悪する。よく学び、よく遊ぶ、その遊びを肯定する事が出来ても、ただ遊ぶひと、それほど私をいらいらさせる人種はいない。

ばかな奴だと思った。しかし、私も、ばかであった。負けたくなかった。偉そうな事を言ったって、こいつは、どうせ俗物に違いないんだ。この次には、うんと引っぱり歩いて、こづきまわして、面皮をひんむいてやろうと思った。

いつでもお相手をするから、気のむいたときに、このおでんやに来て、そうして女中を使って僕を呼び出

しなさい、と言って、握手をしてわかれたのを、私は泥酔していても、忘れてはいなかった。

と書けば、いかにも私ひとり高潔の、いい子のようになってしまうが、しかし、やっぱり、泥酔の果の下等な薄汚いお色気だけのせいであったのかも知れない。謂わば、同臭相寄るという醜怪な図に過ぎなかったのかも知れない。

私は、その不健康な、悪魔の許にいそいで出掛けた。

「おめでとう。新年おめでとう。」

私はそんな事を前田さんに、てれ隠しに言った。

前田さんは、前は洋装であったが、こんどは和服で

あった。おでんやの土間の椅子に腰かけて、煙草を吸っていた。痩(や)せて、背の高いひとであった。顔は細長くて蒼白く、おしろいも口紅もつけていないようで、薄い唇は白く乾いている感じであった。かなり度の強い近眼鏡をかけ、そうして眉間(みけん)には深い縦皺(たてじわ)がきざまれていた。要するに、私の最も好かない種属の容色であった。先夜の酔眼には、も少しましなひとに見えたのだが、いま、しらふでまともに見て、さすがにうんざりしたのである。

　私はただやたらにコップ酒をあおり、そうして、おもに、おでんやのおかみや女中を相手におしゃべりし

た。前田さんは、ほとんど何も口をきかず、お酒もあまり飲まなかった。

「きょうは、ばかに神妙じゃありませんか。」と私は実に面白くない気持で、そう言ってみた。

しかし、前田さんは、顔を伏せたまま、ふんと笑っただけだった。

「思い切り遊ぶという約束でしたね。」と私はさらに言った。「少し飲みなさいよ。こないだの晩は、かなり飲みましたね。」

「昼は、だめなんですの。」

「昼だって、夜だって同じ事ですよ。あなたは、遊び

のチャンピオンなんでしょう？」

「お酒は、プレイのうちにはいりませんわ。」

と小生意気な事を言った。

私はいよいよ興覚めて、

「それじゃ何がいいんですか？　接吻（せっぷん）ですか？」

色婆め！　こっちは、子わかれの場まで演じて、遊びの附合いをしてやっているんだ。

「わたくし、帰りますわ。」女はテーブルの上のハンドバッグを引き寄せ、「失礼しました。そんなつもりで、お呼びしたのでは、……」と言いかけて、泣き面（つら）になった。

それは、実にまずい顔つきであった。あまりにまずくて、あわれであった。

「あ、ごめんなさい。一緒に出ましょう。」

女は幽（かす）かに首肯（うなず）き、立って、それから、はなをかんだ。

一緒に外へ出て、

「僕は野蛮人でね、プレイも何も知らんのですよ。お酒がだめなら、困ったな。」

なぜこのまますぐに、おわかれが出来ないのだろう。

女は、外へ出ると急に元気になって、

「恥をかきましたわ。あそこのおでんやは、わたくし、

せんから知っているんですけど、きょう、あなたをお呼びしてって、おかみさんにたのんだら、とてもいやな、へんな顔をするんですもの。わたくしなんかもう、女でも何でも無いのに、いやあねえ。あなたは、どうなの？　男ですか？」

いよいよキザな事を言う。しかし、それでも私は、まださよならが言えなかった。

「遊びましょう。何かプレイの名案が無いですか？」

と、気持とまるで反対の事を、足もとの石ころを蹴って言った。

「わたくしのアパートにいらっしゃいません？　きょ

うは、はじめから、そのつもりでいたのよ。アパートには、面白いお友達がたくさんいますわ。」

私は憂鬱(ゆううつ)であった。気がすすまないのだ。

「アパートに行けば、すばらしいプレイがあるのですか？」

くすと笑って、

「何もありやしませんわ。作家って、案外、現実家なのねえ。」

「そりゃ、……」

と私は、言いかけて口を噤(つぐ)んだ。

いた！　いたのだ。半病人の家の者が、白いガーゼ

のマスクを掛けて、下の男の子を背負い、寒風に吹きさらされて、お米の配給の列の中に立っていたのだ。家の者は、私に気づかぬ振りをしていたが、その傍に立っている上の女の子は、私を見つけた。女の子は、母の真似をして、小さい白いガーゼのマスクをして、そうして白昼、酔ってへんなおばさんと歩いている父のほうへ走って来そうな気配を示し、父は息の根のとまる思いをしたが、母は何気無さそうに、女の子の顔を母のねんねこの袖で覆いかくした。

「お嬢さんじゃありません？」

「冗談じゃない。」

笑おうとしたが、口がゆがんだだけだった。

「でも、感じがどこやら、……」

「からかっちゃいけない。」

私たちは、配給所の前を通り過ぎた。

「アパートは？　遠いんですか？」

「いいえ、すぐそこよ。いらして下さる？　お友達がよろこぶわ。」

家の者にお金を置いて来なかったが、大丈夫なのかしら。私は脂汗（あぶらあせ）を流していた。

「行きましょう。どこか途中に、ウイスキイでも、ゆずってくれる店が無いかな？」

「お酒なら、わたくし、用意してありますわ。」
「どれくらい？」
「現実家ねえ。」
アパートの、前田さんの部屋には、三十歳をとうに越えて、やはりどうにも、まともでない感じの女が二人、あそびに来ていた。そうして色気も何もなく、いや、色気におびえて発狂気味、とでも言おうか、男よりも乱暴なくらいの態度で私に向って話しかけ、また女同士で、哲学だか文学だか美学だか、なんの事やら、まるでちっともなっていない、阿呆(あほ)くさい限りの議論をたたかわすのである。地獄だ、地獄だ、と思いなが

ら、私はいい加減のうけ応えをして酒を飲み、牛鍋（ぎゅうなべ）をつつき散らし、お雑煮（ぞうに）を食べ、こたつにもぐり込んで、寝て、帰ろうとはしないのである。

義。

義とは？

その解明は出来ないけれども、しかし、アブラハムは、ひとりごを殺さんとし、宗吾郎は子わかれの場を演じ、私は意地になって地獄にはまり込まなければならぬ、その義とは、義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似ている。

底本：「太宰治全集９」ちくま文庫、筑摩書房
１９８９（平成元）年５月30日第１刷発行
１９９８（平成10）年６月15日第５刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
１９７５（昭和50）年６月～１９７６（昭和51）年６月発行
入力：柴田卓治
校正：かとうかおり
２０００年１月23日公開
２００５年11月６日修正
青空文庫作成ファイル：